

## 「元全共闘の証言」

2020年05月08日

最近、全学共闘会議（以下-全共闘）に関心が集まっている。全共闘が活躍した時から50年が経った。安倍政権一強に抵抗する勢力は極めて貧弱である。それらが、全共闘への関心を集めているのであろうか。私は、1967年に神学校を卒業して伝道師になったので、全共闘世代より、2、3年前になるが、全共闘の思想や活動には大きな関心を寄せていた。

全共闘は大学の自治や制度に異議を唱える「大学紛争」から出発した。それが、時代の体制や価値観を根底から問い直す運動に展開し、中国の文化大革命の「造反有理」、権力や体制に逆らうことを正義とする思想に進み、ゲバルト（暴力）を是認し、革命を叫ぶまでに至った。私は、体制や価値観を問い直す異議申し立て、大学生としての特権を捨てる「自己否定」の考えに共鳴した。教会の議論でも、偉い先生方の一言、二言で、問題を終わらせることが多く、突っ込んだ議論を聞くことがなかったからである。教会の若い牧師たちは、主イエスを時代に徹底的に反抗した方として、また、自己否定し、十字架まで貫徹された方として受け止めているので、全共闘へのシンパが多かったのは当然であった。全共闘は安直な革命を説き、市街での暴力的な振る舞いから幼稚さが見え、市民の支援を得られなくなっていくた。東大の安田講堂に立て籠もった全学連を機動隊が排除し、活動の終焉を迎えた。その後、セクト争い、リンチ事件、あさま山荘、よど号ハイジャック事件が起こり、世の中を震撼させた。社会の厚い壁の前で、彼らはニヒリズムに埋没したのである。私は、全共闘の問いかけは今も正しいと思い、彼らの問に真摯に答えようとしなかったことに不満を抱いている。その後、彼らはどのような人生を送ったのであろうか。

『続・全共闘白書』を編纂した実行委員会が、後期高齢者を目前にした元全共闘の人々に4000通近いアンケートを送り、約450通の返答を得た。『週刊金曜日』は5月20日号で、その結果を報告している。興味深いので紹介し、私の感想も書きたい。

まず、回答者数は出身大学ごとに、東京大56人、日本大34人、明治大33人、法政大19人、中央大・早稲田大18人、京都大13人、立命館大12人、東工大11人、同志社大10人、九州大・慶応大8人。／憲法はどうすべきか？ 改正20.6%、堅持66.8%、加憲3.8%。／安倍政権の改憲？ 賛成2.0%、反対93.9%。／日米安保をどうする？ 廃棄62.6%、堅持5.2%、修正26.5%。／支持政党？ 立憲民主党47.5%、支持政党なし14.3% 民社党11.2%、れいわ新選組5.2%、共産党3.6%、自民党2.7%。／注目する言論人？ 白井聡2.5%、佐藤優2.2%、内田樹2.2%、青木理2.0%、中島岳志・山本太郎1.6%。／最も好きな政治家？ 山本太郎13.2%、枝野幸男4.9%、小沢一郎3.1%、福島瑞穂2.0%、辻元清美1.6%、保坂展人・森ゆうこ1.3%。／最も嫌いな政治家？ 安倍晋三60.8%、麻生太郎12.1%、菅義偉11.4%、松井一郎2.5%、橋下徹・稲田明美1.8%。／好きな言論人？ 白井聡4.2%、青木理4.0%、前川喜平・内田樹・吉本隆明2.5%、姜尚中2.2%、／嫌いな言論人？ 百田尚樹・櫻井よしこ17.7%、橋下徹3.6%、竹中平蔵2.2%。

アンケートに答えたのは、全共闘に思いを残している人が多く、時流に乗って出世した人は応じなかつただろう。草の根の市民運動として定着している九条の会に関わっている人は、60年代の安保闘争、70年代の全共闘に関わった人が多いと言われている。私は「世の中こういうもんだ」という老成した人の言い分に対し「本当にそうなのか」と問う姿勢を持ち続けてきた。全共闘から時代に抗う問いを持つことを教えられたことは確かである。主イエスは人間の罪を見据え、時代と厳しく対峙しておられた。